慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	都市社会の構成
Sub Title	
Author	奥井, 復太郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1936
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.30, No.11 (1936. 11) ,p.1621(29)- 1642(50)
JaLC DOI	10.14991/001.19361101-0029
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19361101-0029

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

のものである。

三　結論

之を以つて見れば民有國營事業又は産業の國家管理は經營形態として見れば何等不可思議のものではない。今日の私企業の向ふ可き當然の道程である一經營形態に外ならないのである。蓋し今日純なる國有事業の經營は漸次民營の色彩を取り入れつつあると共に私企業は漸次國營化されつつあるからである。此故に純なる私企業を許さずとすれば純なる國營事業則ち國有國營たる可しとなす世間の議論は經營形態として見れば吾人の贊する能はざる所である。否純なる私企業に非ず又純なる國營事業に非ざる中間の經營形態こそ正に今日の經營形態の向ふ可き目標であるからである。（一一―一〇―二〇）

都市社會の構成

奥井復太郎

（一）

都市社會は勿論、都市社會學の對象である、從つて都市社會學の何たるやを知らんが爲めには、都市社會の構成を豫め明瞭にしなければならぬ。殊に、都市社會學は、農村社會學と對照的に置かれてゐる。即ち、此の兩者は、他の社會學部門に對して何らかの共通點を持つと共に、其の間、又、何等かの差異を持つてゐるものと解せられてゐる。社會學文獻に於いても、又、社會學研究機關に於いても、いづれもかゝる解釋を持つてゐるものゝ如くである。（本稿に於いては特に文獻的考證を省いた。從つて是等の點について詳しき照會を避ける。唯、參考の爲めに、F・N・ハウス著「社會學の發達」――一九三六年――を擧げておく、殊に第五編第廿五章を見られたい。）

然らば何が他の社會學部門より、之れ等兩者を分離せしめる共通點であり、又何が是等兩者を相互に區別せしむる點であるかを一應檢討して見よう。

先づ、都市・農村社會學は、一般社會學に對して特殊部門である事は云ふ迄もない。而して特殊部門としても文化社會學、知識社會學、教育社會學、經濟社會學等々、所謂帝國主義的とも云はれるほど廣汎に亘つて、いづれも一

應は「社會學」たる事を要求してゐる、誠に極まりなき複雜多岐の特殊部門中にあつて都市・農村社會學は、都市・農村なる事實によつて規定された特殊部門である。然らば、此の特殊社會學は豫め存在する「都市」と「農村」との事實によつて規定されてゐるのか、其れとも、是等事實は、同時に又、社會學的に特殊のものとして規定され得るのか、換言すれば、社會學的な取扱ひの以前に既に都市・農村の觀念を吾々は持つのであるか、それとも、社會學的な取扱ひが、都市・農村なる事實を見出すのであるか。

實際的に見れば、吾々、社會學以前に於いて都市・農村を觀念してゐるのである。吾々の綜合合的複合的知識は、吾々の日常生活内に農村と都市とが存在する事を明瞭に知覺せしめてゐる。故に、「之れを社會學的に見れば……」と云ふ事になる。殊に前掲書「社會學の發達」の著者も認めてゐる樣に特殊社會學の部門は理論よりも、寧ろ實際問題の必要に迫られて成立した傾向が著しい故に、此の場合にあつても、都市及び農村が先決的に與へられてゐると云つて差支ない。併し、此の範圍にあつてかゝる知覺を構成せしむるものは、社會學的認識では無い。其れ故に學問的に見れば、單なる「農村と都市」の觀念や知覺によつて導かれる事は、頗る不當と云はれねばなるまい。して見れば、社會學的な取扱ひが都市・農村なる事實を規定しなければならぬのが當然である。元來、都市とか農村とか云ふ名辭それ自體が社會學のものでは無い。唯、實際としては、「都市なるもの」「農村なるもの」に社會學的注視が注がれるのであるからして、假りに「農村」の觀念には「農業」と云ふが如き經濟的觀念が介入して來る事を妨げ得ない。「農」それ自體を社會學で規定してゐるのではない。要するに「都市・農村」はかゝるもの、かゝる實在として社會學的認識の對象となり得るし、之れによつて規定され得るものであつて、都市と呼び、農村と呼ぶが故に、超社會學的に規定されてゐるのだと云ふ必然性は毫も無いのである。

（二）

都市と農村とが社會學的に規定されて來る第一の機緣となるものは果して何か。恐らく都市・農村社會學の對象となるものは、各々の社會生活であり、各生活が「地域的に規定せられてゐる」點で之れを取上げてゐると云つて差支あるまい。例を擧げて見よう。例へば家族である。家族は一つの社會體であり、社會學の一對象物である。しかし、家族として丈けで之れを取扱ふならば、一般社會學乃至はある一定の特殊社會學（家族社會學とも云ふか）の問題となる。しかし此の家族生活を地域的に規定して考へると、家族生活は「都市的か」又は「農村的か」に規定された生活となつて來る。かゝる場合に於いて都會家族、農村家族は、明かに、一般社會學や他の特殊社會學の取扱ふものとは異つた範疇に入つて來る。是等の「家族」は都市・農村社會學的に取扱はれて其の特殊性を最も判然と示す事が出來る。要するに吾々は都市と云ひ農村と云ふ場合、一定の地域的領域内に於ける生活集團の事を考へてゐるのである。此の集團の生活態樣を先づ觀念するのである。

故に、都市・農村社會學が先づ特殊部門として成立する要件としては、是等社會學は、社會生活を「地域的に規定する」と云ふ點に發足するものと見て差支あるまい。實際、人間の生活は土地に立脚して行はれる。假に精神的な交渉にしても、直接乃至は間接に土地又は空間の關係が伴つて來る。神に對する敬慕は、天と地の隔を感ぜしむるで

あらうし、見えざる敵に向つての憎惡は、其の間に空漠の所感を伴はしめるであらう。併かし、又生活が土地に立脚するにせよ、反對にその土地、空間の關係から游離せしめて考へる事が出來る。即ち單なる關係、作用として人間の生活を把握する事も出來る。例へば工場街に生活する勞働者群も、「工場街」的に即ち地域的に見ないで、勞働者として此の一群を把握する事も出來る。若し斯くの如く游離せしめられて考察される場合、又土地に規定されないで考へられ得る生活等に於いては、かゝる生活を「都市・農村」的に地域社會學的に取扱ふ事は困難となり、且つ不可能である。此の點で都市社會學は地理學殊に人文地理學と可なり緊密な關係を持つて來ると云へる。勿論兩者の間には判然と區別すべき特徴はあるにしても、外見的には寧ろ類似を思はせる研究種目が無いでもない。

故に先づ「都市」及び「農村」は社會學的には地域觀念として先決される。そこで、地域とは何ぞやと云ふ、課題が社會學的に提出される。

（三）

地域とは勿論空間的擴がりに外ならぬが茲に云ふ所の地域とは、特定の社會生活體によつて占められる空間的擴がりに外ならぬ。從つて農村とか都市とかは、其の各々の生活體が占める地域内の社會觀念に外ならない。其の爲めには、都市なり農村なりが、いづれも一定の社會生活體であると云ふ條件と共に、是等生活體は一定の地域を占據してゐると云ふ條件の、二つが前提とされてゐる。吾々の日常の知覺に基いても、都市及び農村は、一般的社會生活體中に於ける特定な生活形式であり生活態として現はれて來てゐる。其の各々が如何なる生活體であるかは、本稿の中心問題であり、且つ又、都市、農村の各々を區別する重大な問題であるが故に後段に於いて漸次説明する事とならう。此の生活體は、同時に一定の地域を占據しており、且つ其の地域は都市對農村の關係に於いては、相互獨立して成立し、都市及び農村の兩生活體がより大なる社會生活體の内に包含せらるゝと同樣の意味に於いて兩地域はより大なる地域の内に包含せらるゝ。換言すれば、一國社會の生活體の内に都市と農村との特殊生活體があり、一國々土が都市と農村との兩地域に分割されてゐるのである。斯くの如き地域觀念は、恰も、都市及び農村の行政區劃的觀念に相應する所から、兩者を混同するの危險を惹し易いが之れは充分注意しなければならぬ。又、都市とか農村とかに就いての吾々の日常の知覺が、此の行政區劃的觀念によつて有力な影響を受けてゐる爲めに、社會學的な、都市・農村論に、殊更に「地域」なる觀念を持ち出して來たものでもない。米國都市社會學では、「社會とは運動の可能なる個人間の距離の關係である」と看做してゐる。距離とは時空の觀念であり、こゝでは主として空間の觀念である。既に述べた樣に空間、地域の關係を游離して社會關係を考へる事も不可能ではない。故に都市社會にしたところで空間的觀念を游離して眺める事が出來る。例へば、異質的構成の社會（ヘテロヂェニアス）と云ふ考方は、少くとも其れ丈けでは空間觀念を伴つてゐない。併かし吾々は、さうした社會生活體が一定の地域を占據して成立してゐる事實を看過する事も出來ない。この生活體は事實、空間的に限界づけられてゐる。此の點からして、例へば空間的觀念を無視して成立し得る契機とは別種なものと見て來なければならぬ。例へばプロレタリアは祖國を持たぬと云ふ、從つて彼等のプロレタリアとしての關心は、超地域的である。故に萬國の彼等の團結が要求され

主張される。此の意味に於ける關心又は機能乃至は生活の樣相を殊に社會學的對象とする場合は、都市乃至農村を對象とする場合とは、全く異つて來るのである。後者にあつては、地域的に規定された、――或ひは地域的に表現された――生活體として都市なり農村なりが對象となつて來る。從つて又、異質的、同質的構成が問題になつて來るのである。プロレタリアの生活關心丈けについて云ふならば質的觀念の異同を其の中に探求する必要は毫も無い。社會構成が異質的だとか同質的だとか云ふのは、諸種の契機を藏した生活體を問題にするからである。かゝる場合に於いて問題になる社會は、即ち地域社會ではあるまいか。生活機能の各々に就いて云ふならば質の異同は當初より問題外である。從つて問題は、其の土地に於いて、是等生活體が營む生活とは何であるかの點に移るのである。

此の點、所論が聊か地域性を强調し過ぎたかも知れない。例へば國民社會を國土とは離して考へる事が出來無いとは云へない。しかし國民社會と云ふ場合、吾々は國土と云ふ限定された地緣關係に基いた生活體を考へさせられる。同樣に、都市にせよ、農村にせよ、地域から游離して考へられない事はあるまい。唯、吾々は、かゝる生活體を問題とする時、然る可き約束によつて同一地域內に居住棲息する生活集團を先づ觀念せざるを得ない。この意味に於いて地域性を强調するのである。

（四）

都市と農村とがどうして出來たかの問題は茲では觸れる必要が無いと思ふ。此の問題に關する筆者の見解は既に發表されてゐる。（「社會科學論纂」所載拙稿「都市問題研究序論」參照）今でも其の點に就いて特に改める必要を感じてゐない。現在見るが如き都市現象が過去に於いて果して如何なるものであつたか、將來に於いて如何に成り行くかの題問に就いても觸れる必要はあるまい。斯くの如きものとしては、問題は別個に提出されなければならぬ。

目下の所、吾々は問題の視界を現在に限つて差支ないと思ふ。そして巨大なる人口集團としての大都市現象を吾々の對象にすれば差支ない。

現在に於ける都市現象は、單なる人口集團として既に百萬人以上數百萬人を密集せしめた生活體となつて居る。而して、一國人口の十分の一內外が此の巨大なる中央都市の生活者であると云ふ割合になつてゐる。其の占むる所の地域も亦從つて廣大である。此の場合、行政區劃を用ふるのは不當であるかも知れないが、其の間幾分の關聯を有するものとして、利用する事を許さるゝならば、都心を中心として半徑數十哩に及ぶ圓面積に亙り、一府一縣の面積に比敵する。（是等の數字は何づれも本稿に於ては殊に避けた。統計による詳細な論述は、主として骨組を目的とする本稿に肉附けする機會に讓つておく）勿論、何程の人口集團を以つて都市と名づけ得るやは一問題で在り得る。普通、大都市、中都市、小都市等の量的區別を附して、相當に幅廣い楷程の人口集團を都市と名づけてゐる。唯、是等の各種の都市はそれ〴〵其の時代の社會的經濟的事情によつて規定されて、斯くの如き楷程となつて現はれたものであつて、此の意味に於いて量に於ける相違は質に於ける相違となつて現はれて來る。交通の便なる場合には集中的現象多く、不便なる場合には散在的傾向が盛である。現在、改良的意途に於いて云はるゝ大都市分散の如きは、集中現象の反面に外ならぬ。（勿論、此の場合、現在の社會の經濟的社會的構成を前提としてゞある。既に數百萬の人口集團の存在が、同じ前提に立つてゐる。假りに異なれる社會經濟構成に前提を有するとなれば、恐らく異つた現象が現はれて來るであらう。）

五

斯くの如き都市を一生活體として、如何に把握するか。恐らく都市生活者は、いづれも市民なる意識を意識的潜在的に持つてゐるであらう、勿論、茲に云ふ市民とは、所謂、地方政府の問題とする市民觀念では無い、輓近都市政府が盛んに唱導する市民意識とは、當該行政體に對する忠誠意識に外ならない。此の意味に云ふ市民意識は、必ずしも全部の都市生活者に固有してゐるとは考へられない。一部市民が己の行政體に對して忠實であると否とに拘らず、彼等は市民である。都市生活者としての意識を持つてゐる。乃至は、都市生活者として行動してゐる。茲で云ふ意識的又は潜在的の市民意識と云ふのは此の意味のものである。

然らば、此の意識は何から發するか、恐らく同一地域に於ける共同生活なる事實に基くものであらう。單に、同一地域なる事實は、若し之れを皮相的に解釋するならば是等生活者の地理的環境的接近を語るに過ぎぬ。故に偶然乃至は一時的に其の土地に存在するところの異分子も、或ひは同一地域内の存在者であるかも知れない。然かも彼等は直にそれを以つて市民とも云へないし、市民の意識を持つてゐるとも云へない。即ち、市民たるの意識を感じ又、かく行動するには、更に共同生活の一事實が必要である。既に、地域を論じた所で地域とは特定の社會生活體によつて占められる空間的擴りを云ふと述べたが、茲でも同じ事が考へられてゐるのである。故に其の土地に共同生活を營まぬ者の偶然的一時的な存在は、此の際問題にならぬ。彼等は旅行者であり、外來者である。

故に共同生活なる一事は、此の際、特殊の檢討を必要とする。何を以つて共同生活と云ふか、如何にして市民がかゝる意味の共同生活を營んでゐるか、之れを研究せねばならぬ。本稿の目的は主として茲に在る。何故かと云へば、都市・農村社會學者の云ふ樣に、都市とは、異質的な、極端的差隔を有する諸分子から成立したものである。假りに、最も極端な例を採つて都市に其の豪奢を誇る貴顯と、喪家の狗の如き浮浪者との間に如何なる共同生活が在るか、假りに共同生活が無いとすれば何れが本當の市民であるか、又反對に共同生活がありとすれば如何なる點に於いてゞあるか。是等の問題に就いて答へられねばならぬ。

本然の意味に於ける共同生活とは、何らかの意義に貢献する協力的集團生活を指す、唯漠然と若干の人間が集つて生活してゐる事實は決して本來の意味の共同生活では無い。例へば家族は共同生活體である。其處には一定の意義に就いての協力がある。國民社會も共同生活體である、意義に對する寄與が約束されてゐる。都市生活は、果して此の意味に於ける共同生活體であらうか。勿論家族の場合に於ける程、判然たる意義への協力は認め難い。寧ろ雜然とした生活集團である樣に思はれる。勿論、國民社會に於ける共同生活者が其の生活を意義づけてゐる態樣は決して判然としたものでなく、往々にして其の意義づけすら疑はれる事もあるが、それでも、都市社會に比較して國民社會は一つの判然たる生命を持つてゐる事は明かである。都市社會は斯くの如き生命を持つてゐるかどうか。都市は一個のオルガニズムであると解釋されてゐるが、有機體ならば、當然生命を持つてゐる。然らば都市の生命とはどんなものか、如何に之れが吾々に了知せらるゝか、此の問題に對しては、聊か懷疑的ならざるを得ない者も少なくあるまい。都市と云ふのは、國民的文化的寄與の社會過程に於いて成立した一つの生活態樣では無からうか。

かゝる生活態様の二集團が即ち都市社會であり都市的共同生活なのではあるまいか。人間の社會的文化的寄與は恐らく二つの方面に分たれる、一つは奉仕即ち與へる事であり、今一つは自己充實即ち受くる事である。共に文化的寄與であり、一つのものゝ兩面に過ぎない。都市はかゝる寄與の過程に成立した一つの生活態様として、勿論、意義を持つ。無意義では無い。或る都會主義的論者の如く都市は自由の淵源である、文明の希望であるとまで云ふのはいかゞかとしても、今のべた意味の所產として全然無意義では無からう。從つて此の約束の内に規定された生命を持つと云つて差支ないかも知れない。唯、此の生命は、制度化された組織體そのものゝ持つ生命の如く判然としたものでは無い。家族は社會的文化的寄與の過程に於いて成立した制度であり組織體である。故にそれ自體は、社會全體への意義づけによつて制約せられるものではあるが、獨自の生命を持つてゐる。同じ様に都市政府も判然たる生命を持つ制度化された組織體である。從つて此の生命に關する限り、確かに市民社會は共同生活體である。併し再三繰返して述べてゐる様に、吾々の取扱ふ都市社會は、此の組織化制度化されたものでは無く、むしろ其の基底を爲す、實體的のものである。此の點、問題は國民社會と國家の關係に近似してゐる。故に都市社會の生命が認め難いのは當然と云はねばならぬ。

恐らく問題は、茲で、社會的實體と制度化的組織體との關係に觸れなければなるまい。國民社會と國家、都市社會と市政府等々の關係に言及せねばなるまい。兩者は當然無關係ではない。寧ろ、組織體は社會的實體の持つ生命及び意義を具體化したものだと云へる。併し又、だから兩者を同一視すべき理由とはならぬ。茲では、論述を此の點に止めて、要するに兩者は吾々の思惟上、區別すべきものである事を云ふに止める。

斯くの如くして、都市社會は、社會的文化的寄與の過程に於いて成立した一つの集團的生活態様として、意義及び生命を持つと考へられる。從つて此の意味に於いて都市生活者は、共同生活體を構成してゐるのである。勿論文化的寄與の内容は複雜である。其れ故に、共同生活體と云つても、生活の凡べてに亙つて單純な協力が行はれるとは云へない。寧ろ、既に述べた様に、都市生活の内容は異質的であるが故に、反撥、乖離、衝突、抗爭等の現象が盛んに生ずるを普通とする。

（六）

かゝる反撥乖離にも拘らず、共同生活なる一事實、即ち文化的寄與の關係が、而して之れによつて生ずる特殊なる生活態様が、恐らく市民意識を決定するのであらう。從つて、吾々は此の特殊な生活態様の分析解剖に入らねばならぬ。それこそ、社會學中の特殊部門として取扱はれる都市・農村社會學にあつて更に都市と農村とを識別する手段となり得るものである。

都市と農村の生活態様に就いては、既にその對照が論ぜられてゐる。例へば職業、環境、人口、社會（コムミユニティー）、動き、構成様式、社會的接觸等々の諸點に就いて兩者の差違的特徴が論ぜられてゐる。（詳しくは、ソロキン・ジンマアマン共著「都市・農村社會學原理」參照）。或ひは又、都市・農村社會の結合形式によつて其の相違を求める、即ち都市社會は契約社會であるに對して農村社會は身分社會であると見る。是等の諸點は恐らく全部的に或ひは部分的に正鵠を得

た要點であらう。しかし、是等について詳論する餘裕は無い。唯、都市と農村との對比に於いて注意すべき點は、都市社會の構成が、農村の單一性に對して複合性であると云ふ點である。此の特徴は、都市社會の構成それ自體を說明する上にも必要な要點であるが故に多少詳細に論ずべき價値がある。

米國の都市社會學者が「都市社會はいくつかの村落社會の集合である」と述べた事は、此の點に重要な關係を持つ。恐らく、彼は村落社會と云ふ觀念によつて、何にも、農業的活動を想起してはゐなかつたであらう。彼は之れによつて農村々落の單一性構成を念頭に置いたのであらう。即ち都市は、村落の樣な單一性構成を持つた部落がいくつか集つた社會構成、複合性的構成であると觀察したものと思はれる。

單一性構成とは、社會力、習俗等に於いて單一的な統一のある社會を指す。換言すれば、個人と全體との關係が單一である場合に外ならぬ。かゝる社會構成は地域的に狹少な社會に於いて當然な現象で村落にあつては、村全體がかゝる單一的な統一體となつてゐる。個人に對して考へられるのは此の統一的全體のみである。反之、都市社會に於いては、都市全體の統一性の外になほ各個人を規律する統一性がある。換言すれば、都市に於ける個人は一つの二重統制の下に置かれてゐる。此の二重統制の內、一つは都市全體としての統一であるが、も一つの統制は、都市內部に於ける近隣的統一である。町內的統制である。故に都市に於いては各個人は二種の異つた統一下に置かれ農村の場合に於けるが如く、個人――全體の關係で終らずに個人―┌全體（一）┐―全體（二）と云ふ、複合的關係に置かれるのである。例を以つて云ふと、國家生活の內にあつては、一市民は一市民であると同時に一國民であると云ふ事になる。之れは一種の複合性的構成である。之れと同樣に、都市社會にあつては、一市民は同時に其の都市內部の何等かの部落の住民なのである。大都市に於ける、斯くの如き複合性的構成を見出した事は、近來米國都市社會學の最大の貢獻と云ふべきであらう。

（七）

都市は其の發展（人口增加）と膨脹の過程に於いて體制的な分化を生ずる。一都市の膨脹は、其の地域內に空間的な特殊化を生ぜしめる。茲に云ふ空間的特殊化とは、單なる地理的異同を指すのではなく、空間的に表現された生活態樣の異同を指すのである。村落、小都市に於いては見なかつた、かゝる空間的體制的分化が、都市の發展と共に生ずる事は、バーヂスによつてシカゴ市の調査を以つて明かにされた。それによれば、大都市は都心地區を中心として、いくつかの同心圓的地區に分たれるのであり、都市の膨脹は投石による水面の波紋の擴大の如き狀況を示すのである。斯くの如く劃された地區は、其の內に營まれる生活が同一都市に在り乍ら、幾多の方面に於いて各〻異なるを以つて特色づけられる。即ちそれは廣い面積の單なる機械的な分割ではない。各地區にそれ〴〵の生活があり理想があり、習俗が存するのである。此の種の學問的發見に多大の光明を投じたのは、近來、社會學研究の領域に於いて頓に勢力を增して來た社會生態學の力であらう。社會生態學は特殊部門として、農村・都市社會學、社會生物學等と別個に其の地位を要求しつゝある。（前揭書「社會學の發達」第二十五章第十二章參照）社會生態學が都市社會學に及ぼす力は充分尊重されていゝ。殊に一都市の內部に於ける異質的構成の意義を充分理解せしめた點に於

いて吾々の關心を強く惹くものがある。（唯、此の問題は別の機會に述べらるる可きであらう）。

斯くの如き地區的な異質的構成は、先きに云へる都市社會の複合性的構成を指示する。是等の地區に各々それ自體の生活があり、理想があり、習俗がある。之れを部落と名づけ得るかも知れない。是等部落生活者はそれによつて統一せられ强制せられてゐる。勿論地區によつてはかゝる統一强制の無い所もある。しかし、其の地區には、反對に、他の部落の道德は行はれない。所謂ボヘミアン・クォータアと稱せらるゝ所は、コンヴェンショナルな生活規準を無視してゐる地區であるが、それ丈けに、他の生活規準をして行はしめざる消極的な强制がある。

故に都市生活者は、各自居住する地區の部落的な社會力を先づ感ずる。それと同時に都市全體の社會力にも統制せられる。こゝに村落の場合に於ける單一性構成と異つた複合性的な社會構成が見出されるのである。都市とは村落の集合體であると云ふ命題は此の意味に解釋されて最も正しいと云ふべきであらう。

（八）

扨、都市社會の複合性構成は何に對應し、又如何なる結果を隨伴するか。

先づ之れに對應するものは、都市社會は異質的なるものゝ集合體であると云ふ事實に外ならぬ。農村に於いては職業的に、環境的に傳統的にいづれも統一的同質的である。其の生活の動きも緩漫で變化も徐々である、從つて質的變化を惹起す事が少ない。反之、都市は實に千差萬別の型、理想、生活を集めてゐる。職業的に見て農村の統一性が無い。階級的に見て頗る懸隔がある。環境的には、生活力に應じての差別が見られる。傳統は無視される、權威に就いての統一がない、其の生活の動きは急速で、變化は不斷である。雜多、混淆、背馳、衝突、それが異質的な都市社會の特色である。

斯くの如き異質的分子を含むが故に、唯一つの力の下に統一が行はれないのである。是等のものは各異つた世界に住んでゐるのである。故に各の世界には統一があり傳統があり、權威があつても、之れはそれ等全體、都市全體を通じての統一、傳統、權威とはならないのである。然かるにそれにも拘らず是等の人々は同じ都市生活者であると云ふ共通點を持つ。故に複合性構成と稱せられるのである。

然らば斯かる複合性構成が如何なる結果を隨伴するか。此の問題は、都市社會全體の問題と各個人の問題とに分つて論ずる事が出來よう。

先づ個人に就いて考へて見よう。一個人が二種の統一に服さねばならぬ場合、當然、困難な關係に遭遇する。若し是等統制が相互に相反した性質のものである場合、殊に甚しい。反對に、兩者が補足的乃至は融合的である場合には、個人の處する途は平易である。或ひは又、一方乃至双方の統制が極めて寛恕たる場合もある。現在の都市生活に就いて見ると、兩種の統制が共にその統一を對抗的に强化してゐるとは認め難い。寧ろ第三の場合が今日の實情に該當するものでないかと思はれる。即ち一方又は双方の統制が極めて寛かなものと認められるのではなからうか。都市は自由であると云ふ命題は、個人にとつて强制力の薄弱を意味する。成程、都市に於ける社會的接觸は、村落に於けるが如く即身的（パアソナル）でない。同時に既に述べた樣に、强壓的な傳統、習俗の迫力がない。彼は一應、個身的

な責任から解放されてゐる。一度、彼等の狹い世界（部落）から外に出れば、全く煩雜な束縛、監視的な眼から解放される。恰も旅行者の自由さを以つて振舞ふ事が出來る。此の意味に於いて、少くとも一つの全體的統制は非常に寛大である。

同時にも一つの、即ち部落的統制も、今日決して峻嚴だとは云へない。近代人はあらゆる羈絆より逸脫する事を生活の理想としてゐる。故に、狹い世界の内にあつても相互に干渉せざる事を以つて生活の信條としてゐる。勿論、其の世界に於いて或る生活の信條、理想が行はれ、其の住民は自然、其れに服從してゐる事は既に述べた通りである。しかし、此の服從は、强壓的なものでなく、寧ろ自然的なものである。假りに個人が之れに服し得ぬ場合が生ずれば、其の個人は、直に他の地區（部落）に移り住むの自由を許されてゐる。故に、近き周圍の自然的統制を强壓的に感ずる場合は、何等かの變化がその關係者に生じた時である。環境と個人とが適應を缺く時である。此の場合以外には、部落内の統制について强壓を感ずる事は無いのである。唯、都市生活の場合には、かゝる變化が頗る多く且つ頻繁であり、從つて適應を缺き社會的分裂を生ぜしむる契機の多い事を注意しておく必要がある。

要するに、個人に就いて見れば、都市全體としても、又彼等の部落的世界にしても、强制的迫力は比較的微弱だと云ふ事が出來る。都市はそれ丈け寛大に雜多な分子を包擁してゐるとも云へる。

（九）

次いで都市全體から見ると、異質的分子を綜合する社會としての性質上、統制し得る契機は頗る一般的性質のものでなければならぬ。最も一般的性質のものと云へば、最も迫力の微弱なものに外ならぬ。從つて寧ろ無統制と思はれる狀態に近いものがある。換言すれば無統一を以つて統一してゐるのである。都市社會全體がかゝる狀態に在る事を最もよく知覺し得る方法は、市政關係を見るが一番良い。假りに市民社會に於いて充分な統制、積極的意味の統一があれば、之れは當然、行政機構に之れを反映させる。農村に於ける場合がそれである。然かるに市民が市政に冷淡であると云ふ、當局者より常に反復提唱せらるゝ市民精神の缺除とは、要するに、市民社會の社會的統制が極めて寛裕たる事の反面に過ぎない。成程新聞紙其他の所謂輿論的社會力は相當に强力であらう。しかし其の叱責も、大都市の内部には、之れを免れて生活し得る世界が何處にでも見出されるのである。到底、田舍の輿論の强壓的な迫害に比すべきもので無い。

都市社會は、異つた世界、生活、理想を持ついくつかの集團を抱擁するの寛大さを示さねばならぬ。恐らく此の寛大と自由とに於いて都市社會は、社會文化に寄與し又は、之れを害するに到るのであらう。いづれにしても、複合性社會構成として、都市全體が持つ統一性は、自由を確保すると云ふ意味に於いては、積極的であるかも知れないが、統制を行ひ得ぬと云ふ意味では、最も消極的なものである。

又之れあるが故に、市民各個は寧ろ、其の關心を機能的結合に强化する傾向となる。殊に彼等の部落的社會は、此の社會的機能的一致に沿ふて形成される傾向のものであるから、勞働者街、勤人街、屋敷街等いつれも是等地區的部落生活は同時に特定の生活機能に於ける一致を物語り、從つて彼等の生活、理想、信念に於ける一致を許してゐ

る。都市社會はかうした諸世界の一合成體である。

（一〇）

斯く考察して來ると、共同生活體としての都市社會全體は、何等共通の市民意識を持たぬものゝ様に思はれて來る。成程、共同生活體としての都市の性質は前の節にも述べた通り、文化的寄與が生み出す生活態様として把握する事が出來るかも知れない。併し斯かる寄與に於いて生ずる特殊の生活態様に基いて共同生活體なる意識を率直に自覺し得るのでは無からうか。本然的共同生活體の自覺は共同の價値への貢献即ち意義づけに基くものではあるが、斯かる意義づけの過程に於いて成立した生活態様は、同時にそれだけで、共同生活の意識を發生せしめ得ないであらうか。假りに家族は、既に述べた様に本然的共同生活體であり、特定の價値への貢献を意味する生活體である。しかしかくして成立した家族それ自體は、家族生活それだけで既に共同生活を意識されてゐると考へ得ないであらうか。市民社會に於ける、共同生活意識は恐らく此の第二義的意識であると考へ得る。此の意識に基いて市民社會が成立する。

かゝる意味の共同生活體は、實際、實にもつと効利的な實際的な市民的關心に基く集團意識に結び着き得る。

市民は生活機能に於いては、異質的であると述べた。換言すれば、文化的寄與の積極的方面、即ち奉仕、「與へる」活動に於いては、異質的である。而して、此の事は既に述べた様に對立乃至は抗爭の關係、少くとも無關心の關係を生み出す。然らば文化的寄與の消極的方面即ち自己充實、「受くる」活動に於いては、將して如何。結論を先きに云ふならば此の方面の生活には、充分廣汎な共通點を見出す、しかし、必ずしも全部が悉く共通し得るものでない事情も看逃せない。

都市に於いては種々な働きが社會化され、制度化されるの事實がある。例へば農村では各戸に於いて各自給水準備を行ふに對して、都市に於いては水道經營となつて現はれる。農村に於ける隣保救匡の仕事は、都市に於いて社會事業となる。斯くの如くして部市に於いては多くの働きが社會化され組織立てられ、制度化されて來る。又農村に於ける綜合的な多角的な働きは、都會に於いては單一專門化特殊化される。例へば、家事、育兒、教育等々が都會に於いては、それ〳〵專門の機關に委ねられて、各人の活動を單一、專化するに對して、農村に於いては、家庭の綜合、多角的な營みの内に含まれてゐる。

斯くの如きはいづれも、組織化による經濟法則の規定する所と云つて差支あるまい。唯、之れが爲めには、都市生活の如き、密集的な生活形式を必要とする。巨大な需要と之れに伴ふ資力とは集合的な經營を可能ならしめる。そは恐らく營利主義的なると否とを問ふ必要があるまい。要するに、生活充足に必要なる働きを、斯く社會化した市民は茲に、一應、共通の關心を生ぜしむる筈である。即ち、街路、土木、交通、水道、電氣、瓦斯、教育、衛生、娯樂、經濟、治安等に於いて彼等は、一應、是等の經營の整備をいづれも待望してゐる。即ち彼等は生活充實の方面に於いて、少くとも共通の關心を持つてゐる。嘗て、「市民的意識は主として消費者的關心に基く」と述べたが、茲に再び、同じ事を云ひ得る。

是等の關心は、實際、都市の共同生活者なるが故に生じたものであり、之れは、都市生活者の部落的存在丈けでは成立し得ぬ性質のものであるが故に、確かに此の種の關心は都市生活全般に係るものである。故に此の「生活充實」の方面に於いて確かに共同生活の實を主張する事は出來る。

然かれ共、かゝる共通的關心は果して、何處まで堀り下げて行く事が出來るか、之れに就いては充分疑なきを得ない。何故かと云へば、「生活充實」なる方面も決して各人皆一樣と云ふを得ないからである。例へば交通機關の改善は市民の大部分にとつて重大な關心事である。何となれば、此の生活環境の良否は、彼等の生活機能及び充實に直接的影響を及ぼすから。併かし、市營電車の經營如何によつて、切實な影響を感ずるのは、市民全部ではない。大部分ではあるが要するに一部である。他の一部は自働車疾走に快適な道路の完成をより望むであらう。水道料金の低廉は何人も望む所である。併かし一部には、若干の値上げにも痛痒を感じない者が少くない。都市美觀は、尊重さる可きである。しかしもつと切實な生活要求を持つた階層もある。ラヂオの演藝放送にも色々と相反して註文が出る。

斯くの如くして、生活充實の方面に於いても決して關心の均一性は無い。假りに、諸種の經營が基本的原始的のものから、漸次上昇して來るに連れて、益ゝ均一性は失はれて來るであらう。吾々は決して、此の方面に於ける隔差を必要以上に强調し樣とするのでは無い。確かに、可なり幅の廣い階層に亙つて關心の統一は成立し得る。しかし、それにしても、大衆性、貴族性の相違は殘るであらう。市民的關心が此の意味で大衆的である所に吾々は特に興味を惹かれる。即ち、市民とは、是等の經營に於いて一厘一毛の利益を追求する生活階層を指すものではないかと。

（一一）

是等の事實からして、吾々は都市社會の構成が頗る異質的なるを知る。元來、社會學的に見ると、吾々は、都市と云ふ巨大なる人口集團を、要するに何萬、何十萬、何百萬かの單なる人口集團と見做す傾がある。實際に於いて何十萬、何百萬と云ふ人口群が日常生活に於いて何等質的相違の無い、均等なものとして存在すると云ふ事は考へられないのである。百萬の大軍は、日常生活の現象ではない。否、百萬の大軍すら唯の百萬人の集合ではない。內に質的な軍隊的構成を持つてゐる。

かゝる點に就いて、社會生態學は確かに、訓へる所が在つた。即ち都市は均等な量的構成でなくて、質的な交錯的構成であると。其の結果吾々は寧ろ其の本然的な共同的意義に就いて把握す可き契機を失つたかも知れぬ。此の事は又、確かに現代大都市の社會相に照應する事が出來る。世人は大都市生活の個人主義化と獨善主義的生活を非難する。都市生活に對する毀譽褒貶は頗る喧しい。成程かゝる生活態樣が一國文化に寄與するところ在りとするも都市生活の全部が悉く有意義だとは云へない。惡德、犯罪、狡智、冷淡等の社會惡が相當根强く張つてゐる事を否むを得ない。それにも拘らず、吾々が社會改良的意圖を離れて見るならば、有るが儘の生活態樣をそのまゝ受け取らねばならぬ。

都市社會學の立場から見れば、道德的批判、改良主義的判斷を別にして、一定の地域内に於ける巨大なる、日常生活集團としての都市社會は、之れこそ、中心的對象に外ならぬ。一個の共同生活體としての此の日常生活集團は、實際に於いて、都市を限定する調査的對象となつてゐる。都市社會學者は、此の特殊な生活態樣に於いて日常生活を營む範圍を求めて、都市地域としてゐる。吾々が大都市生活圏の探求に於いてとつた方法も亦、此の指針によつたのである（拙稿「大都市生活圏の調査」參照）。

都市社會は斯くの如きものとして、特定の生活態樣を持つた共同生活體であり、其の社會的構成は複合性構成となつてゐる。それ故に、自由、流動、變化等の現象が顯著となり、從つて又制度化組織化の過程が著しく發達してゐる。ソロキン・ジンマアマンが數項に擧げた、都市對農村の社會的特色は恐らく社會的複合性構成の一事實に其の根本を有するのでは無からうか。併し、如何にして、複合性構成であるか、何故都市社會は異質的構成なのかに就いては、都市發生の源由に遡らねばならぬ。唯、それは本稿の目的では無いが故に茲では論及してゐない。唯、都市社會學の對象とする都市社會の構成に就いて所見を論述したに過ぎぬ。

（昭和十一年十月二十二日）

附　記

本稿は、文中にも一言しておいた樣に、骨組を示したに止まつて肉附けがしてない。此の仕事は更に後に讓り度い。それ故、例證、引用等は殆ど全部これを避けた、目的とする所は、都市社會の性質を明かに、之れによつて諸般の都市生活現象の理解を高めるに在り。なほ推敲すべき點が多々あると信ずる、此の意味では未定稿に過ぎない、諸賢の御教示をまつ所以である。

金ブロックの崩壞を中心とする若干の貨幣問題

金原賢之助

一、佛蘭西の金本位離脱

一九三三年倫敦に開催された世界經濟會議決裂の結果、佛蘭西、白耳義、和蘭、瑞西、伊太利並にポーランドの間に金ブロック(Gold Block)が結成されるや、その存續の如何は、世界貨幣制度の動向を左右するモメントとして、世界の注目を惹くに至つた。而して既にその事の豫想された通り、金ブロックの維持は頗る困難な問題であつて、經濟上・政治上・社會上の問題ある毎に危惧の念を以て迎へられ、又その度毎に金ブロックの危機は深刻を加へつゝあつた。而して、其の一環たる白耳義は既に一九三五年三月の危機に際して金本位離脱・平價切下を餘儀なくせられ、以てブロックから脱落したが、伊太利は一九三四年五月から嚴重な爲替管理を施行した、又ポーランドも一九三六年四月に爲替管理を施行して、孰れも其の實を喪失するに至つた。

然るに佛蘭西、和蘭及び瑞西の三國は、殘存金ブロックとして、幾度かの危機にも金本位を死守して來たのであるが、本年第二・四半期には從來經驗しなかつた最も深刻な通貨不安に襲はれた。それにも拘らず、殘存金ブロック國は多額の金を犧牲にし、且つ若干の爲替取引の制限を實行して之を切拔け、夏季には金の流出が終熄したのみな